

— 新年感謝祈禱 —



司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、



てんのおうなぐさむるものよ、しんじつの
天 王 慰 者 眞 實

しん、あらざるところなきもの、みたざ
神 在 所 者 満

るところなきものよ、ばんぜんのほうぞうな
所 者 萬 善 寶 蔵

るもの、せいめいをたもうのしゅよ、
者 生 命 賜 主

きたりてわれらのうちにおり、われらを
來 我 等 中 居 我 等

もろもろのけがれよりいさぎよくせよ、
諸 穢 潔

しぜんしゃよ、われらのたましいをすくいた給
至 善 者 我 等 靈 救 給

ま え。

誦經) せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎよ しゅさい われら あやまち ゆる
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を赦

せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ
せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の国は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにちわれら あた たま われら
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等

きょうあく すく たま
を凶悪より救い給え。

けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
司祭) 蓋國と権能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。



しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ
誦經) 主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

きた われら おう かみ こうはい きた われら おう かみ こうはいふふく
來れ、我等の王・神に叩拜せん。來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

【 第64聖詠 】

かみ ほめうた おい なんぢ ぞく ちかい おい なんぢ つくの
神よ、讚頌はシオンに於て爾に屬し、盟はイエルサリムに於て爾に償われん。

なんぢ きとう き およそ にくしん なんぢ はし つ ふほう おこない われ か なんぢ われら
爾は祈禱を聴く、凡の肉身は爾に趨り附く。不法の行は我に勝ち、爾は我等

つみ きよ なんぢ えら ちか なんぢ にわ お もの さいわい われら なんぢ
の罪を淨めん。爾が選び近づけて、爾の庭に居らしむる者は福なり。我等は爾の

いえ なんぢ せい でん ふく あ た ぎはん おい おそ べ もの かみ わ きゅうせいしゅ ち
家、爾の聖殿の福に飽き足らん。義判に於て畏る可き者よ、神、我が救世主、地の

しきよく とお うみ お もの たのみ そのちから やま た けんとう お もの うみ さわぎ
四極と遠く海に居る者との恃よ、其力にて山を建て、権能を帯ぶる者よ、海の騒、

そのなみ こえ およ しよみん みだれ しづ もの われら き たま ち はて お もの なんぢ
其波の聲、及び諸民の亂を鎮むる者よ、我等に聴き給え。地の極に居る者は爾の

きゅうちよう おそ なんぢ あさゆう おこ なんぢ さんえい なんぢち のぞ そのかわき
休徴を畏れん。爾は朝夕を起して爾を讚榮せしめん。爾地に臨みて、其渴を

とど ゆたか これ と かみ ながれ みづみ なんぢこくもつ そな けだしか ごと これ
 止め、豊に之を富ましむ、神の流には水盈ち、爾穀物を備う、蓋此くの如く之
 つく なんぢそのたみぞ の そのつちくれ たいら あめ したたり もつ これ やわ しゆくふく
 を作り、爾其畷に飲ませ、其塊を平げ、雨の滴を以て之を柔らげ、祝福
 め いだ なんぢ おんたく もつ とし こうむ なんぢ あゆみ あぶらしたた すなわちのべ
 して芽を出さしむ。爾の恩澤を以て年に冠らせ、爾の歩には膏滴る、昂郊邊
 まきば したた おか よろこび お くさはら けもの むれ き たに こくもつ おお よろこ
 の牧場に滴り、丘は喜を帯ぶ、草原は獣の群を衣、谷は穀物にて覆われ、歡
 よ うた
 びて歌う。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は爾に歸す。

【 大聯禱 】

司祭) われらあんわ しゅ いの
 我等安和にして主に禱らん、

しゅ あわれ め よ 。
 主 憐

司祭) うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの
 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、

しゅ あわれ め よ 。
 主 憐

司祭) ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの
 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、

しゅ あわれ め よ 。
 主 憐

司祭) こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの
 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、

しゅ あわれ め よ 。
 主 憐

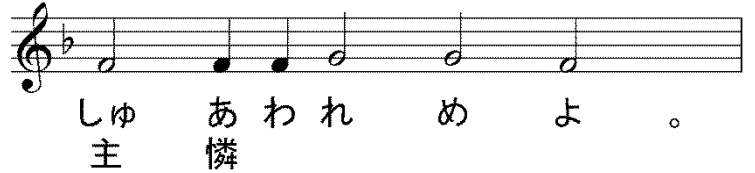
司祭) きょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんだい だい
 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の大

しゅきょう せいせい そんぴん よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ
主 教 セラフィム、司祭の 尊 品、ハリストスに因る 輔 祭 職、 悉 くの 教 衆、及び

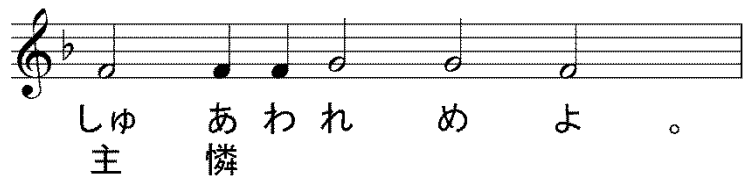
しゅうじん たため しゅ いの
衆 人の爲に主に禱らん、



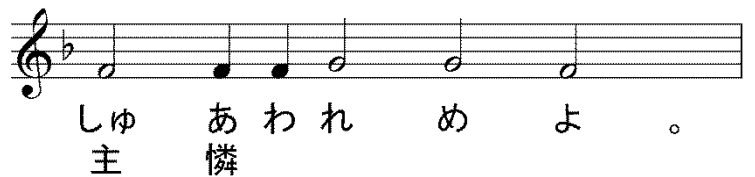
わがくに てんのう およ くに つかさど もの たため しゅ いの
司祭) 我 國の 天 皇、及び 國を 司 る 者 の爲に主に禱らん、



こ まち およそ まち ちほう およ しん もつ こ うち お もの たため しゅ いの
司祭) 此の 都 邑と 凡 の 都 邑と 地 方、及び 信を以て此の 中 に 居る 者 の爲に主に禱らん、



じれん もつ われら ふとう ぼくひ いま かんしゃ きとう そのてんじょう さいだい う こうおん
司祭) 慈 憐を以て我 等 不 當なる 僕 婢の 今 の 感 謝と 祈 禱とを 其 天 上 の 祭 臺に 受 け、宏 恩 なるに 因りて 我 等 を 憐 むが爲に主に禱らん、



よ われら いのり い われら そのしゅうじん きよねん うち おか じゅう ふじゅう
司祭) 善く 我 等 の 禱 を 納 れて、我 等 と 其 衆 人 とに 去 年 の 中 に 犯 しし 自 由 と 不 自 由 との

ことごと つみ ゆる たため しゅ いの
悉 くの 罪 を 赦 すが爲に主に禱らん、



じんあい おんちよう もつ こんねん はじめ そのひ おく ふく くだ てんか たいへい きこう
司祭) 仁 愛 の 恩 寵 を以て、今 年 の 始 と 其 日 を 送 る こととに 福 を 降 し、天 下 の 泰 平、気 候

じゅんわ およ われら ざいか そうけん まんぞく いのち わた たま たため
の 順 和 なる こと、及び 我 等 に 罪 過 なく、壮 健 に 満 足 して 生 を 度 る こと を 賜 わる が 爲
しゅ いの
に 主 に 禱 らん、



われら つみ よ およ ぎ かな われら のぞ いかり や たため しゅ いの
司祭) 我 等 の 罪 に 依 りて、凡 そ 義 に 稱 いて 我 等 に 臨 む 怒 を 遏 むる が 爲 に 主 に 禱 らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 凡そ 靈 を害する 慾と 敗れたる 風俗とを我等より遠ざけ、神を畏るる 畏を我が

こころ い そのいましめ おこな ため しゅ いの
心に納れて、其 誠 を行わしむるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 正しき 靈 を我等の衷に改め、我等を 醇正の教に固め、善事を行い、其凡

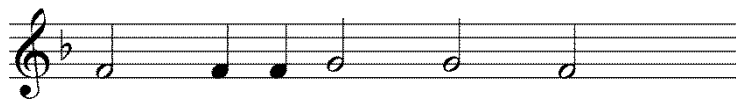
いましめ まも ねつしん もの な ため しゅ いの
の 誠 を守るに熱心なる者と爲すが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 凡の異端と 歧教とを滅し、遍き處に 醇正の教と 敬虔とを植え付け、凡そ正

きょう そむ もの しんり し てん かれら せい きょうかい あわ ため しゅ いの
教に背きし者を眞理を知るに轉ぜしめて、彼等を聖なる 教會に合すが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 聖なる 教會と我等衆人とを凡の憂愁と、禍害と、忿怒と、危難、及び 悉く

み み てき のが そのしんじゃ そうけん ちょうじゅ へいあん たま しよてん
の見ゆると見えざる 敵より脱れしめ、其信者に 壯健と 長壽と、平安とを賜い、諸天

し しゅご もつ つね かれら まも ため しゅ いの
使の守護を以て常に彼等を護るが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 神よ、爾の 恩寵を以て、我等を 佑け 救い 憐み 護れよ、

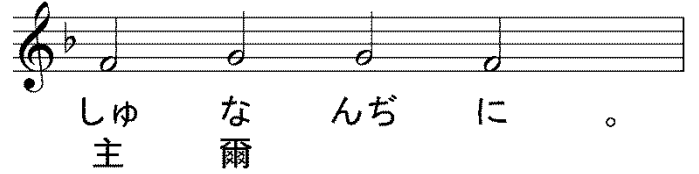


しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 至聖至潔にして 至りて 讚美たる我等の 光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に 悉くの我等の

いのち もつ 生命を以て、ハリストス ^{かみ}神に委託せん、 ^{いたく}



司祭) ^{けだし} 蓋、^{およ} 凡そ ^{こうえい} 光榮・^{そんき} 尊貴・^{ふくはい} 伏拜は ^{なんぢちち} 爾父と子と ^こ 聖神に ^{せいしん} 歸す、^{いま} 今も ^{いつ} 何時も ^{よよ} 世々に、



【 主は神なり 第4調 】

司祭) ^{しゅ} 主は ^{かみ} 神なり、^{われら} 我等を ^{てら} 照せり、^{しゅ} 主の名に ^な 依りて ^{きた} 來る者 ^{もの} は ^{あが} 崇め ^ほ 讃めらる、



^{しゅ} 主を ^{さんえい} 讃榮せよ、^{けだしかれ} 蓋 ^{じんじ} 彼は仁慈にして、^{そのあわれみ} 其 ^{よよ} 憐は世世にあればなり。



司祭) ^{かれらわれ} 彼等我を ^{かこ} 圍み、^{われ} 我を ^{めぐ} 環りたれども、^{われしゅ} 我主の名を ^な 以て ^{もつ} 之を ^{これ} 敗れり、^{やぶ}

しゅ は か み な り、 わ れ ら を て ら せ り、
 主 神 我 等 照

しゅ の な に よ っ て き た る も の は、 あ が め ほ め
 主 名 依 來 者 は 崇 讚

ら る。

司祭) ^{われし}我死せず、^{なおい}猶生きて^{しゅ}主の^{しわざ}所爲を^{つた}傳えん。

しゅ は か み な り、 わ れ ら を て ら せ り、
 主 神 我 等 照

しゅ の な に よ っ て き た る も の は、 あ が め ほ め
 主 名 依 來 者 は 崇 讚

ら る。

司祭) ^{こうし}工師が^す棄てたる^{いし}石は^{おくぐう}屋隅の^{しゅせき}首石と^な爲れり、^こ此れ^{しゅ}主の^な成す^{ところ}所にして、^{われら}我等の^め目に^{きい}奇異な
 りとす。

【 讚詞 第4調 】

しゅ よ、 わ れ ら な ん ぢ の ふ と う の ぼ く ひ た る も
 主 我 等 爾 不 當 僕 婢 者

の、 な ん ぢ の お お い な る お ん を こ う む る に よ
 爾 大 恩 被 因

り て、 か ん しゃ の こ こ ろ を い だ き な ん ぢ を と う と
 感 謝 心 抱 爾 尊

み う た い ほ め あ げ か ん しゃ し、 な ん ぢ の じん
 歌 讚 揚 感 謝 爾 仁

じを あがめ ぼくの つつしみ かつ あい をもって なん
 慈 崇 僕 の 慎 且 愛 以 爾
 ちによ ぶ、われらにおんを たも うきゅう せい
 呼 我 等 恩 賜 救 世
 しゅよ、こう えいは なんぢの もの な りと 。
 主 光 榮 爾

【 讃詞 第3調 】

こう えいは ちちと こと せい しんに き ず 。
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 しゅさいよ、われら いたって あたら ざる ぼ
 主宰 我 等 至 當 僕
 く ひ、なんぢのおんと たまもの とを こうむ
 婢 爾 恩 賜 物 被
 りて、ねっしんを もって なんぢに はしり つ き
 熱心 以 爾 趨 附
 ちからにおうじて かんしゃを たてまつり、なんぢ
 能力 応 感謝 獻 爾
 おんを たも うしゅと ぞうぶ つしゅたる を ほめ あげて
 恩 賜 主 造 物 主 讚 揚
 よ ぶ、いたって ひろき めぐみの か み
 呼 至 広 恵 の 神
 よ、こう えいは なんぢの もの な りと 。
 光 榮 爾

【 新年の讃詞 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何時 世世

ときととしとを おのれのけんないにおきたま
 時 歳 己 権内 置 給

いし ばんぶつのぞうせいしゅよ、なんぢの
 萬物 造 成 主 爾

おんたくをもつて としにこうむらせ、
 恩澤 以 年 冠

しょうしんぢよのきとうによりて、われらをへ平
 生 神女 祈 禱 因 我 等 平

いあんにももりてすくいたまえ。
 安 守 救 給

【 提綱 (プロキメン) 】

司祭) ^{つつし} 慎みて^き 聴くべし、^{しゅうじん} 衆人に^{へいあん} 平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^わ プロキメン、^{しゅ} 吾が^{おおい} 主は^{そのちから} 大なり、^{またおおい} 其力も亦^{そのちえ} 大なり、^{はか} 其智慧は^{がた} 測り難し、

わがしゅはおおいなり、そのちからもまたおお
 吾 主 大 其 力 亦 大

いなり、そのちえははかりが難
 其 智慧 測 難

た し。

誦經) ^{しゅ ほ あ} 主を讃め揚げよ、^{けだしわれら かみ うた ぜん} 蓋 我等の神に歌うは善なり、^{けだしこ たのし こと} 蓋 是れ 樂 しき事なり、

わ が しゅ は お お い な り、 そ の ち か ら も ま た お お
 吾 主 大 其 力 亦 大
 い な り、 そ の ち え は は か り が 難
 其 智 慧 測 難
 た し。

誦經) ^{わ しゅ おおい} 吾が主は 大なり、^{そのちから またおおい} 其力も亦 大なり、

そ の ち え は は か り が た し。
 其 智 慧 測 難

【 使徒經 (ティモフェイ前書2章1~6節) 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴエルがティモフェイに達する書^{たつ}の讀^{しよ よみ}、

司祭) ^{つつし} 謹みて聽くべし、

誦經) ^こ 子ティモフェイよ、^{われおよそ こと さき} 我 凡の事に先だちて勸む、^{すす} 衆人の爲、^{しゅうじん ため ていおう およ およ けん と} 帝王、及び凡そ權を操

^{もの ため きとう きがん こんきゅう かんしゃ な} 者の爲に、祈禱、祈願、懇求、感謝を爲さんことを、^{われら およそ けいけん せいけつ} 我等が 凡の敬虔と聖潔とを

^{もつ へいあん おんせい いのち わた ため} 以て平安にし、^{けだしこ われら きゅうしゅかみ まえ ぜん} 穩靜なる 生を度らん爲なり、蓋 此れ我等の救主神の前に善にし

^{い こと かれ しゅうじん すくい え およ しんじつ し いた} て納れらるる事なり、^{ほつ けだし} 彼は 衆人が救を得、及び眞實を知るに至らんことを欲す。蓋

^{かみ いつ かみ ひと あいだ ちゅうほしや またいつ すなわちひと} 神は一なり、神と人との間には 中保者も亦一なり、乃 人ハリストス イイス、

^{しゅうじん ため おのれ あた もの かれ ぞんけい こうえい よよ き} 衆人の爲に己を與えし者なり。彼に尊敬と光榮とは世世に歸す、アミン。

(比較用 口語訳) わたしの子テモテよ、まず第一に勧める。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと、祈と、とりなしと、感謝とをささげなさい。それはわたしたちが、安らかで静かな一生を、真に信心深くまた謹厳に過ごすためである。これは、わたしたちの救主である神のみまえに良いことであり、また、みこころにかなうことである。神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであつ

て、それは人なるキリスト・イエスである。彼は、すべての人のあがないとしてご自身をささげられたが、それは、定められた時になされたあかしのほかならない。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、

【 アリルイヤ 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ} 神よ、^{ほめうた} 讚頌は^{おい}シオンに^{なんぢ}於て^{ぞく}爾に屬す、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾 ^{おんたく} は恩澤を^{もつ}以て^{とし}年に^{こうむ}冠らす、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書4章16~22節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて^{せいふくいんけい} 立て聖福音經を^き聽くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、

なんぢの し んにも 。

爾 神

司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時イイス其養育せられし所のナザレトに來り、安息の日に、其常例に依りて、

會堂に入り、讀まんと欲して立てり。預言者イサイヤの書を彼に與うるあり。彼は書を披きて、左に録せる所を出せり、云わく、主の神我に在り、蓋彼は我に膏して、貧しき者に福音せしめ、我を遣して、心の傷める者を醫し、擲者に糶を、瞽者に見ることとを傳え、壓せらるる者に自由を與え、主の禧年を傳えしめたりと。乃書を掩い、役者に與えて座せしに、會堂に在る者皆彼に目を注げり。彼宣べ始めて曰えり、此の爾等が聴きし所の書は今應えり。衆皆之を證し、且其口より出づる恩寵の言を奇とせり。

(比較用 口語訳) それからイエスはお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように會堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別して下さったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、會堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。そこでイエスは、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめられた。すると、彼らはみなイエスをほめ、またその口から出て来るめぐみの言葉に感嘆した。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

【 増聯禱 】

司祭) 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) 又教曾を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる仙台の

主教セラフィム、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) 主宰、主我等の救世主よ、我等不當の僕婢として、畏れ戦き、爾が豊に其諸僕婢に

注ぎたる諸恩の爲に爾の仁慈に感謝して俯伏し、爾に神に適いたる讃揚を奉り、

傷感の情を以て呼ぶ、爾の諸僕婢を諸の禍より免しめ、其慈憐なるに因りて常に

我等衆人の善き望を適え給え、熱心にして爾に禱る聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) 爾の仁慈を以て今來りし年の始に祝福し、我等の内に凡の不和と、不整理と、

紛争とを治め、我等に和平と、堅固にして偽なき愛と、正しき整理と、徳行の度生

とを賜わんことを、至善なる主よ、爾に禱る聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) 去年の中に有りし我等の數え難き不法と惡事とを憶わず、我が行に由りて我等に

報いずして、仁愛と宏恩とを以て我等を顧ることを、慈憐なる主よ、爾に禱る聆き

納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主憐 主憐 主憐

司祭) とき ^{かな} には ^{はや} 合いたる ^{またおそ} 早く又 ^{あめ} 晩き ^{ほうねん} 雨、^{つゆ} 豊 ^{おんせい} 稔の ^{じゅんわ} 露、^{かぜ} 隠 ^{あた} 静にして ^ひ 順 ^{おんだん} 和なる ^{おんだん} 風を ^{おんだん} 與え、^{おんだん} 日の ^{おんだん} 温暖

を ^{かがや} 輝 ^{こうおん} かす ^{しゅ} ことを、^{なんぢ} 宏 ^{いの} 恩 ^き なる ^い 主 ^{あわれ} よ、^{あわれ} 爾 ^{あわれ} に ^{あわれ} 禱 ^{あわれ} る ^{あわれ} 聆 ^{あわれ} き ^{あわれ} 納 ^{あわれ} れ ^{あわれ} て ^{あわれ} 憐 ^{あわれ} め ^{あわれ} よ、

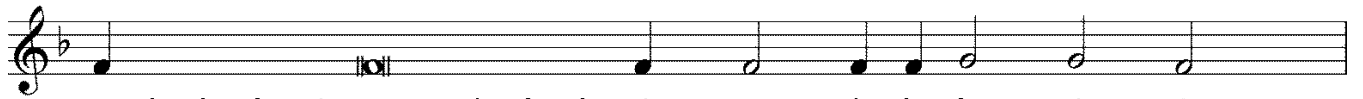


しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め、^{あわれ} しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め、^{あわれ} しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め ^{あわれ} よ。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{せい} の ^{きょうかい} 聖 ^{きおく} なる ^{これ} 教 ^{つよ} 會 ^{これ} を ^{かた} 記 ^{これ} 憶 ^{ひろ} して、^{これ} 之 ^{これ} を ^{これ} 強 ^{これ} く ^{これ} し、^{これ} 之 ^{これ} を ^{これ} 固 ^{これ} く ^{これ} し、^{これ} 之 ^{これ} を ^{これ} 弘 ^{これ} め、^{これ} 之 ^{これ} を ^{これ} 平 ^{これ} 和 ^{これ} に ^{これ} し、

^{これ} 之 ^{ちごく} を ^{もん} 地 ^{なや} 獄 ^み の ^み 門 ^{しよてき} に ^{ことごと} 惱 ^{あくぼう} ま ^{やぶ} さ ^{もの} れ ^{もの} ず、^{もの} 見 ^{もの} ゆ ^{もの} る ^{もの} と ^{もの} 見 ^{もの} え ^{もの} ざ ^{もの} る ^{もの} 諸 ^{もの} 敵 ^{もの} の ^{もの} 悉 ^{もの} く ^{もの} の ^{もの} 惡 ^{もの} 謀 ^{もの} に ^{もの} 破 ^{もの} ら ^{もの} れ ^{もの} ざ ^{もの} る ^{もの} 者 ^{もの} と ^{もの} し、

て ^{よよ} 世 ^{まも} 世 ^{ぜんのう} に ^{しゅさい} 護 ^{なんぢ} ら ^{いの} ん ^き こと ^い を、^{あわれ} 全 ^{あわれ} 能 ^{あわれ} なる ^{あわれ} 主 ^{あわれ} 宰 ^{あわれ} よ、^{あわれ} 爾 ^{あわれ} に ^{あわれ} 禱 ^{あわれ} る ^{あわれ} 聆 ^{あわれ} き ^{あわれ} 納 ^{あわれ} れ ^{あわれ} て ^{あわれ} 憐 ^{あわれ} め ^{あわれ} よ、



しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め、^{あわれ} しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め、^{あわれ} しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め ^{あわれ} よ。

司祭) ^{およ} 凡 ^{いほう} そ ^{くらのやみ} 異 ^{ほろぼ} 邦 ^{いま} の ^{なんぢ} 幽 ^し 暗 ^{しよみん} を ^{まこと} 滅 ^{ふくいんけい} して、^{ひかり} 未 ^{てら} だ ^{てら} 爾 ^{てら} を ^{てら} 知 ^{てら} ら ^{てら} ざ ^{てら} る ^{てら} 諸 ^{てら} 民 ^{てら} を ^{てら} 眞 ^{てら} の ^{てら} 福 ^{てら} 音 ^{てら} 經 ^{てら} の ^{てら} 光 ^{てら} に ^{てら} て ^{てら} 照 ^{てら} さ

ん ^{だいゆうのう} こと ^{しゅ} を、^{なんぢ} 大 ^{いの} 有 ^き 能 ^い の ^{あわれ} 主 ^{あわれ} よ、^{あわれ} 爾 ^{あわれ} に ^{あわれ} 禱 ^{あわれ} る ^{あわれ} 聆 ^{あわれ} き ^{あわれ} 納 ^{あわれ} れ ^{あわれ} て ^{あわれ} 憐 ^{あわれ} め ^{あわれ} よ、



しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め、^{あわれ} しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め、^{あわれ} しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め ^{あわれ} よ。

司祭) ^{われら} 我 ^こ 等 ^{きた} に ^{とし} 此 ^わ の ^{いのち} 來 ^{ことごと} り ^ひ し ^{おい} 年 ^{ききん} と、^{えきびよう} 我 ^{ぢしん} が ^{すいなん} 生 ^{すいなん} 命 ^{すいなん} の ^{すいなん} 悉 ^{すいなん} く ^{すいなん} の ^{すいなん} 日 ^{すいなん} に ^{すいなん} 於 ^{すいなん} て、^{すいなん} 饑 ^{すいなん} 饉 ^{すいなん} ・ ^{すいなん} 疫 ^{すいなん} 病 ^{すいなん} ・ ^{すいなん} 地 ^{すいなん} 震 ^{すいなん} ・ ^{すいなん} 水 ^{すいなん} 難 ^{すいなん} ・

^{かなん} 火 ^{ひょうがい} 難 ^{けんなん} ・ ^{がいこう} 雹 ^{ないらんおよ} 害 ^{しまね} ・ ^{しよがい} 劍 ^{およそ} 難 ^{うれい} ・ ^{あやうき} 外 ^{まぬか} 攻 ^{まぬか} ・ ^{まぬか} 内 ^{まぬか} 亂 ^{まぬか} 及 ^{まぬか} び ^{まぬか} 死 ^{まぬか} を ^{まぬか} 招 ^{まぬか} く ^{まぬか} 諸 ^{まぬか} 害 ^{まぬか} と、^{まぬか} 凡 ^{まぬか} の ^{まぬか} 憂 ^{まぬか} 愁 ^{まぬか} と、^{まぬか} 危 ^{まぬか} 難 ^{まぬか} と ^{まぬか} を ^{まぬか} 免

れ ^{じあい} し ^{しゅ} め ^{なんぢ} ん ^{いの} こと ^き を、^{あわれ} 慈 ^{あわれ} 愛 ^{あわれ} なる ^{あわれ} 主 ^{あわれ} よ、^{あわれ} 爾 ^{あわれ} に ^{あわれ} 禱 ^{あわれ} る ^{あわれ} 聆 ^{あわれ} き ^{あわれ} 納 ^{あわれ} れ ^{あわれ} て ^{あわれ} 憐 ^{あわれ} め ^{あわれ} よ、



しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め、^{あわれ} しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め、^{あわれ} しゅ ^{あわれ} あ ^{あわれ} わ ^{あわれ} れ ^{あわれ} め ^{あわれ} よ。

司祭) ^{かみ} 神 ^わ 、^{ききゆうせいしゅ} 我 ^ち が ^{しきよく} 救 ^{とお} 世 ^{うみ} 主 ^お 、^{もの} 地 ^{たのみ} の ^{たのみ} 四 ^{たのみ} 極 ^{たのみ} と ^{たのみ} 遠 ^{たのみ} く ^{たのみ} 海 ^{たのみ} に ^{たのみ} 居 ^{たのみ} る ^{たのみ} 者 ^{たのみ} と ^{たのみ} の ^{たのみ} 恃 ^{たのみ} よ、^{われら} 我 ^き 等 ^{たま} に ^{しゅさい} 聞 ^{しゅさい} き ^{しゅさい} 給 ^{しゅさい} え、^{しゅさい} 主 ^{しゅさい} 宰 ^{しゅさい}

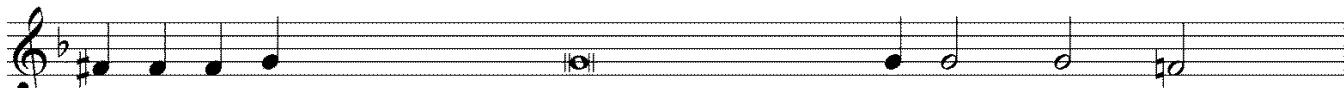
よ、^{われら} 我 ^{つみ} 等 ^{じんじ} の ^{じんじ} 罪 ^{じんじ} に ^{われら} 仁 ^{あわれ} 慈 ^{たま} を ^{けだしなんぢ} 垂 ^{じんじ} れ、^{じんじ} 仁 ^{じんじ} 慈 ^{じんじ} を ^{じんじ} 垂 ^{じんじ} れ ^{じんじ} て ^{じんじ} 我 ^{じんじ} 等 ^{じんじ} を ^{じんじ} 憐 ^{じんじ} み ^{じんじ} 給 ^{じんじ} え、^{じんじ} 蓋 ^{じんじ} 爾 ^{じんじ} は ^{じんじ} 仁 ^{じんじ} 慈 ^{じんじ} に ^{じんじ} して ^{じんじ} 人 ^{じんじ} を

^{あい} 愛 ^{かみ} する ^{われら} 神 ^{こうえい} な ^{なんぢ} り、^こ 我 ^{せいしん} 等 ^{けん} 光 ^{いま} 榮 ^{いつ} を ^{よよ} 爾 ^{よよ} 父 ^{よよ} と ^{よよ} 子 ^{よよ} と ^{よよ} 聖 ^{よよ} 神 ^{よよ} に ^{よよ} 獻 ^{よよ} ず、^{よよ} 今 ^{よよ} も ^{よよ} 何 ^{よよ} 時 ^{よよ} も ^{よよ} 世 ^{よよ} 世 ^{よよ} に、



ア ^ア ミ ^ア ン ^ア 。

われらひざ かが またまたしゅ いの
司祭) 我等膝を屈めて、復又主に禱らん、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

しゅさいわれら かみ いのち ふし みなもと み ぼんぶつ ぞうせいしゅ とし とし
司祭) 主宰我等の神、生命と不死との源、見ゆると見えざる萬物の造成主、時と歳とを

おのれ けんない たも なんぢ えいち しぜん せつり もつ ぼんゆう つかさど しゅ わ いのち
己の権内に有り、爾の睿智にて至善なる攝理を以て萬有を宰る主よ、我が生命の

す さ ひ おい われら あらわ なんぢ きみょう おんけい ため われらなんぢ かんしゃ こう
過ぎ去りし日に於て我等に顯しし爾の奇妙なる恩恵の爲に我等爾に感謝す。宏

おん しゅ なんぢ いの なんぢ じんじ もつ いまきた とし はじめ しゆくふく わがくに
恩なる主よ、爾に禱る、爾の仁慈を以て今來りし年の始に祝福し、吾國の

てんのう まも そのいのち ひ ぞうか つね かれら そうけん ぼんとく おい かれ しんぼ たま
天皇を護り、其生命の日を増加して、常に彼等を壮健にし、萬徳に於て彼に進歩を賜

え。なんぢ しゅうみん うえ なんぢ ぜんぶく そうけん きゅうしよく およ ばんじ おい よ すすみ
え。爾の衆民にも上より爾の善福、壮健と救贖、及び萬事に於て善き進を


あた たま なんぢ せい きょうかい こ まち ことごと まち ちほう もろもろ わざわい
與え給え。爾の聖なる教會、此の城邑と、悉くの城邑と、地方とを諸の禍よ

のが これら へいあん おんせい たま ねがわ われら つね なんぢむげん ちち なんぢ
り脱れしめて、此等に平安と隱靜とを賜え。願くは我等に常に爾無原なる父と、爾

どくせい こ しせい いのち ほどこ なんぢ しん いったい おい さんえい かんしゃ
の獨生の子と、至聖にして生命を施す爾の神、一體に於て讚榮せらるる感謝を

たてまつ なんぢ しせい な ほ うた え たま
奉り、爾の至聖なる名を讃め歌うを得しめ給わん、

こうえい なんぢかみわれら おんしゅ よよ き
光榮は爾神我等の恩主に世世に歸す、

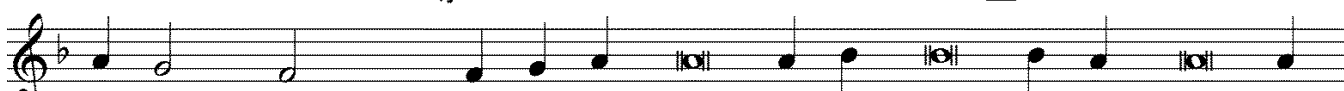


ア ミ ン。

えいち しせい しょうしんぢよ われら すく たま
司祭) 睿智、至聖なる生神女よ、我等を救い給え、



ヘルヴィムよりと うとくセラフィムにならびなく
尊 並



さか え、みさおをやぶらずしてかみこと
榮 貞操 壊 神 言

ばをうみし、じつのしょうしんぢよたるなんぢ
 生 實 生 神 女 爾
 をあがめほむ。
 崇 讃

司祭) ハリストス^{かみわれら たのみ}神我等の^{こうえい なんぢ き}侍よ、^{こうえい なんぢ き}光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 いつもよよに、アミン。しゅあわれめ、しゅ
 何時 世 世 主 憐 主
 あわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだ
 憐 主 憐 福 降
 せ。

司祭) ハリストス^{われら まこと かみ}我等の^{そのしじょう はは こうえい}眞の神は、^{さんび せいしと}其至淨なる母、光榮にして讚美たる聖使徒、

^{こくしょうほうしん}克肖^{わがしよしんぷおよ}捧神なる我^{しよせいじん}諸神父^{きとう}及び^{より}諸聖人の^{われら あわれ}祈禱に^{すく}因て我等を^{かれ ぜん}憐み救わん。彼は善に

^{ひと あい}して人を^{しゅ}愛する主なればなり、

アミン。

司祭) 主よ、いまここ^たに立ちて^{いの なんぢ}禱る爾の^{しよぼくひ}諸僕婢に、^{ばんぶく}萬福にして^{へいあん}平安なる^{どせい}度生、^{そうけん}壯健と

^{きゅうしよく}救贖、^{およ}及び^{ばんじ}萬事に^お於ける^よ善き^{しんぼ}進歩を^{あた}與えて^{かれら}彼等を^{いくとせ}幾歳にも^{まも}護り^{たま}給え、

いくとせも、いくとせも、いく
 幾 歳 幾 歳 幾

と せ も 。 い く と せ も 、 い く
 歳 幾 歳 幾
 と せ も 、 い く と せ も 。 い く
 歳 幾 歳 幾
 と せ も 、 い く と せ も 、 い く と せ
 歳 幾 歳 幾 歳
 も 。

【 萬寿詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の う 、 お よ び
 神 我 國 天 皇 及
 く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ
 國 司 者 我 等 府 主
 き ょ う ダ ニ イ ル 、 だ い し ゆ き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び
 教 大 主 教 及
 こ と ご と く の せ い き ょ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、
 悉 正 教 等
 い く と せ に も ま も り た ま え 。
 幾 歳 護 り 給 え 。

— 新年感謝祈禱終了 —

※「幾年も」は他のメロディでも可。参拝者に合わせて選択してください。